



The Small Figures of the Nativity and the Sacro Monte

坂本 満

① プレセピオ——プレセピオとは、プレセピオ先史、近世西欧における絵画表現—現実感と錯視効果、「小芸術」と「ロー・アート」—プレセピオの場合、イエズス会とバロック、プレセピオ出現—各国におけるその歴史

② サクロ・モンテ——説話・「現実感」、「代用巡礼」の問題、サクロ・モンテ先史、最初のサクロ・モンテ

論文要旨

プレセピオもサクロ・モンテも16世紀のカトリック側の対抗宗教改革によって拡大したもので、前者はイエズス会、後者はフランシスコ会が主導的であった。

ルネサンス以後19世紀までの西欧の絵画・彫刻は、現実再現の程度を強めてゆく傾向が概観される。その点ではプレセピオは現実化した生誕場面を縮小再現し、親密化する点で、サクロ・モンテは劇場での舞台場面をそのまま固定したかのような身近な現実感によって、美術傾向の大筋と共調する傾向をもっていた。

それにも拘らず、これまでの美術史学はこれらの二者を評価することができなかった。その理由は、プレセピオは「小芸術」として「大芸術」である絵画・彫刻・建築から軽視される枠に入れられるからでもある。サクロ・モンテは舞台をそっくりに再現したような絵画・彫刻の複合性だけでなく、頭髪や衣服を実物そのままに用いるといった現実性などによって美術の分類に納まり難かったからでもある。しかし、それ以上に大きな理由として考えられるのは、この両者ともきわめて現実的表現が強く、日常生活をなまなましく再現する力をもっていたことである。19世紀中期に成立した美術史学は、その対象の性格から貴族的なブルジョワの教養や趣好に基く選別を免れていない。芸術愛好家たちの深刻高尚趣味や高価な稀購品集めやお上品好みと、これらの世界はちょうど対極にあるからといえそうなのである。

「つくりもの」研究という主題からするとクリスマスの飾りものであるプレセピオは、その対象として適わしい。これはまた現在も生活の一部になっている点でも興味深い。それに対してサクロ・モンテは「つくりもの」の一時性はない。しかし現代のプレイランドを思わせる構成や仮想現実感の、近世世界の中で最も強調された例として「つくりもの」の世界と通じ合うものを認められはしないかと紹介してみたかったのである。